倉橋燿子・倉橋麻生（著）
『倉橋惣三物語―上皇さまの教育係―』
2021 年　講談社　四六変型　322 頁　定価（本体 1,800 円＋税）

水津 幸恵*

本書は倉橋惣三の人生の物語である。“日本のフレーベル”“近代幼児教育の父”といわれる倉橋の著作に表された保育思想は今も保育者や保育研究者の心に響き、影響を与え続けている。本書は彼が書き遺した日記など貴重な資料をもとに描かれた人生の物語であり、彼の日々の生活から、人となりから、行間にもれる息づかいから、その保育思想がいかにわき起こってきたのかを感じることができる。本稿では、倉橋の人生の物語を動かしていった“偶然”で必然にすら感じられる三つの出会いを中心として、本書の魅力を紹介したい。

第一に、浅草での少年時代における出会いである。倉橋は 1882（明治 15）年に静岡県で生まれたのち岡山市を経て、小学校 4 年生の時に東京の浅草尋常学校に転校することになる。それは代々旗本だった倉橋家の跡取りとして東京帝国大学進学を視野に入れた父親の意向であった。物語はこの浅草での少年時代から始まり、そのことに重要な意味がある。勉強はできるが運動神経が鈍く鈍重で、同級生からは「カメ」や「カエル」とからかわれ馴染めない惣三少年だが、1 歳の妹を背負う 5 歳ほどの小さな男の子、一平と出会う。それをきっかけに年下の子どもたちに「兄ちゃん」と慕われて一緒に遊ぶようになり、かけがえのない時間を過ごしていく。また、小学校が終わったら花魁修行に入るという志乃、大工の息子で浅草っ子らしく威勢のいいブンちゃんこと山中文太といったさまざまな浅草の子どもたちとの出会いが描かれている。その出会いと交流、そしてそこで起こってきた惣三の心に「穴」をあける事件は、のちに中学時代に雑誌『児童研究』の定期購読を始める時にも、お茶の水幼稚園の主事となって幼児教育のあり方について思案する時にも度々回想される。ここでこの事件の詳細を紹介することは控えるが、この浅草での少年時代は、出会ってきた子どもたち一人一人のことを知りたいという具体的な子どもから出発する探究心、そしてどの子どもにも豊かな子ども時代を、幼児教育をと願い奮闘し続ける源となっていることが全編を通して感じられる。

第二に、元良勇次郎先生との出会いである。元良先生は購読していた雑誌『児童研究』に発刊の祝辞を寄せており、倉橋にとって憧れの先生であった。倉橋は帝大に入学し、その憧れの元良先生のもとで学び始める。決して学生を自分の型に入れようとせず「何事も、感じたことを実際に経験することによって、初めて知恵になるものだ」という元良先生のもとで、倉橋はお茶の水幼稚園での実際の子どもとのかかわりから学んでいく。自分にどこか心を閉ざしている子ども、直次郎とのかかわりについて相談した時も、元良先生はあえて何も言わず、倉橋自身が考えて経験し、実感をもって納得することを大切にしていた。それは学び育とうとする倉橋を信頼しているからこそであったといえる。倉橋が父親に結婚相手のトクが平民であることを理由に結婚を反対されたときも、元良先生は病を押して倉橋の実家に赴き「彼を信じてやってください。彼の信じるものを信じてやってください」と熱く説得し、元良先生の言葉とその熱は倉橋の父の心を動かしていく。このことは倉橋にとっても、信頼されることの幸せを、信じることの尊さを体感する出来事だったかもしれない。のちに倉橋は、長男正雄が実家を出て神戸の商科大学に進学したいと言った時や、晩年、当時若き研究者であった津守眞に出会った時に、その未来を信じ、信頼し、背中を押していく。目の前の子どもたちや若い人たちへのまなざしが、元良先生から倉橋へと脈々と受け継がれ、そしてそれがそれぞれの人生を輝かせていったのである。大学時代に元良先生に相談をしていた直次郎と

* 三重大学教育学部　講師

も、直次郎が青年になった時に再会している。その時直次郎は小学校の教師になっていた。人見知りだった直次郎に教育者となる可能性が秘められていたとは、と倉橋は感慨深くなるのである。あとがきにも紹介されている「この子が日蓮になるかもしれない。この子がベートーベンになるかもしれない」という倉橋の言葉は、育とうとする人間の伸びゆくありさまに感嘆するとともに、その人の未来に開かれている可能性を信頼することが、どれほどにその人の背中を押して可能性を広げていくのかという実感のこもったものであったのではないだろうか。

第三に、数えきれないであろう子どもたち、そして親たちとの出会いである。浅草での少年時代については第一で既に述べたが、高校時代から通うお茶の水幼稚園に始まり、大学時代には近所にある盲唖学校や精神、知的障がい児を教育する滝乃川学園、貧民街にあった双葉幼稚園にも度々足を運んでいた。のちに妻となるトクと初めて出かけたのも子どもたちがたくさん遊んでいる浅草公園であった。子どもに交じって紙芝居を見物し、ついには浅草の元締の家に尋ねたりするほどだったというエピソードもある。また、副題にもなっているように明仁皇太子殿下の遊び相手としても出仕し、天皇皇后両陛下へのご進講も行った。さらに、欧州留学後に家庭教育の重要さを実感した倉橋は、それを全国に講演してまわる家庭教育行脚を行っている。それは決して教授的なものではなく、漁村や山間の小さな町に赴き、そこで親たちの思いや悩みを聴き、労い、語り合う、人間同士の温かな付き合いであった。本書の随所には、つまり倉橋の人生には、子ども達と心から楽しんで遊ぶことの喜びと、相手と心を開いて通わせようとする温かみに満ちている。この倉橋のまなざしは、生まれや身分関係なく、すべての子どもたちに注がれていた。さらにそれは子どもだけに限らず親たちにも、第二でも触れたように大人たちにも注がれている。それは子どもに限らず、子どもを始めとする人間一人ひとりを大切にするまなざしといえよう。

一方で、そしてそれゆえに、倉橋の人生は葛藤にも満ちていたように感じられた。ある時は身分を重んじる父親の「平民」という言葉が、またある時は「幼稚園不要論」という言葉が、倉橋の心に重く響く。子どもの社会境遇によって受ける教育に差別があってはならないと熱心に学び、さまざまな子どもたちのもとへ足を運ぶ倉橋であったが、両親共に働けるように長時間子どもを預かる保育所保育が社会事業として取り組まれるようになる中での「幼稚園不要論」を受けて、もっと子どもたちの家庭の事情に思いを馳せなくてはならなかったと苦く振り返っている。しかしそれはのちに、欧米留学でのイギリスのロンドンの社会事業学校での学びや、農繁期に農業の手伝いをすることで子どもが幼児教育の場から引き離されることを問題として作られた農繁期託児所の唱道にも通じていく。また、家庭教育行脚に力を注ぐ一方で、倉橋自身も子育てに思い悩む一人の父親であり、物静かな長男正雄となかなかうまく話ができないと葛藤していた。しかし、だからこそ理想の子育てを教授するのではなく、親たち一人ひとりに寄り添い、語り合うことを大切にできたのであろう。考え続けようとするからこそ葛藤し、葛藤するからこそ人間を大切にしながら前に進み続けていく倉橋の歩みに、一人間としてとても励まされた。

しかも、倉橋の生きた明治、大正、昭和は、大きな二つの戦争、関東大震災、スペイン風邪の流行など大きな事件が起こった時代であった。倉橋もその度に傷つき、葛藤し、苦悩し、それでも子どものために立ち上がる。震災では園舎も街も焼けたところで床板にござを敷いて保育を始めた。戦中にはぎりぎりまで平常通りの「幼稚園」の生活を守り、終戦の4日後には疎開先の姫路からすぐに東京へと戻り、新しい日本の未来を生きる子どもたちのために幼稚園の再開に取り掛かった。そうして手渡されたバトンが今この時代までつながれてきている。今、私たちもまた大きな事件の最中にある。私たちがいかにこのバトンを手渡していくかが問われているのを感じる。

最後に、筆者が倉橋を知ったのは保育研究に取り組むことを通してであったが、本書は心の中に眠っていた13歳の私と一緒に読んだように思う。学校で休み時間になる度に本を開き、まだ見ぬ教室の外の世界とつながることで自分の心を守っていたあの時にこの本に出会っていたなら、倉橋の人間への温かなまなざしと歩みにどれほど勇気づけられただろうか。幼児教育に限らず、年齢を問わず、すべての人が励まされる一冊である。